

## 平成27年度 第2回 吉田町総合教育会議

日 時 平成27年8月12日(水)

10:00～11:30

場 所 役場 2階 町民ホール

### 次 第

#### 1 開会

(1) 町長あいさつ

(2) 教育委員長あいさつ

#### 2 議事

(1) 吉田町教育推進委員会の概要報告について

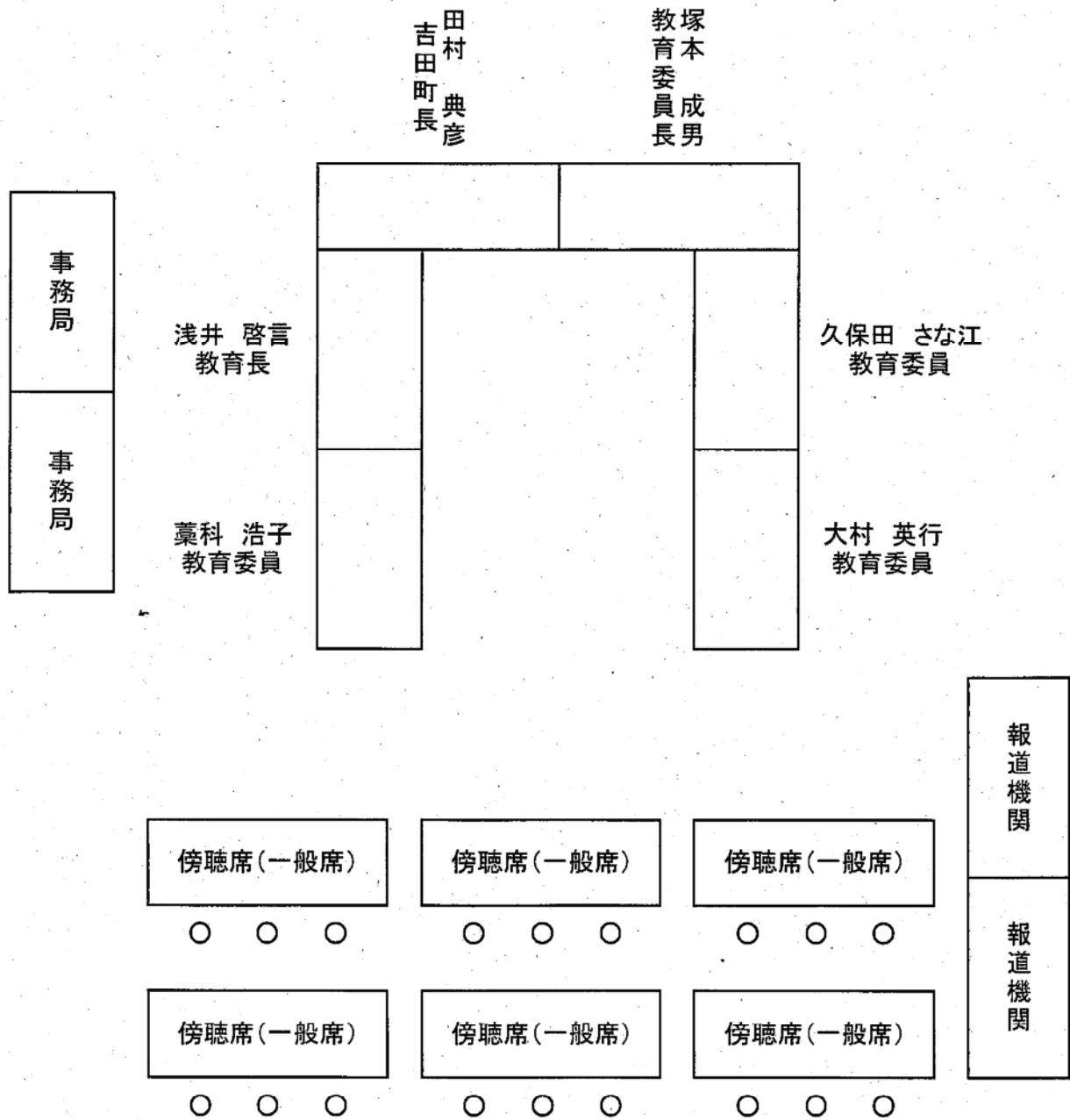
(2) 吉田町の目指す教育について

(3) その他

#### 3 閉会

# 平成27年度 第2回 吉田町総合教育会議 座席表

日時 平成27年8月12日(水) 10:00~11:30  
 場所 役場 2階 町民ホール



## 第1回吉田町総合教育会議 議事要旨

1 開催日時 平成27年5月20日(水) 午前9時～11時

2 開催場所 吉田町役場 2階 町民ホール

3 出席者 吉田町長 田村 典彦  
教育長 浅井 啓言  
教育委員長 塚本 成男  
教育委員長職務代理者 久保田 さな江  
教育委員 藁科 浩子

### 4 協議結果の概要

- (1) 町長と教育委員会が十分な意思疎通を図り、自由な意見交換を行うこと  
によって教育行政の推進を図ることを確認した。
- (2) 総合教育会議の運営方法及び今年度の協議事項について、次のとおり合  
意された。

#### ア 運営に関する事項

- ・ 吉田町総合教育会議運営要綱について
- ・ 吉田町総合教育会議傍聴要領について
- ・ 吉田町教育推進委員会設置について

#### イ 今年度の協議事項

- ・ 教育の大綱に係る協議

### 5 意見交換における発言要旨

#### (1) 学校における教育の課題について

- ・ 価値観の多様化に伴い学校での指導が難しくなっている。本来、**家庭で果たすべき役割(生活習慣等)**が学校で行われており、**肥大化**している。もっとスリムにし、教師が授業に専念する環境がほしい。
- ・ 学校経営に関する事務が多くなっており、以前にも増して精神的な負担が大きくなっている。
- ・ 社会が多様化、変化していることに伴い一律的な対応は難しい。**個々に応じた対応**が求められている。
- ・ 子供たちには、自分で考え、行動する力や豊かな人間性などといった「**生きる力**」を身に付けてほしいが、それは学校のみではできない。学校・

家庭・地域の役割の中で何ができるのか、社会全体で教育を考えていくべきである。

- ・ラーニングプランの推進により「確かな学力」に向けた意識が高くなってきており、授業改善も積極的に行われている。しかし、テストの点数を取るだけのものであってはいけないので、本来「付けたい力」とは何かを考えるべきではないか。
- ・「**社会の変化に対応していく教育**」が必要であると思っている。新しい学校・家庭・地域の連携を模索していく中で、教師が授業に専念できる環境づくりを考えていくべきではないか。
- ・ラーニングプランを1年間取り組んだ結果、どのような変化があったのか、また保護者からどのような意見を聴いているのか、教育現場の実態を把握すべきである。**教師が授業に専念できる環境づくり**を考えることは、教師の多忙化解消のみならず、**多様化するニーズに対する時間を確保**することにつながる。
- ・教師が日々学校でどのような時間を過ごしているか。教師の多忙化の要因は何か。それらを解明していくことが、教師が授業に専念していくための方策につながっていく。

## (2) 家庭における教育の課題について

- ・保護者が子供に何かを伝える上では、「わかりやすく」、「的確に」、「適切なタイミング」でといったことが求められている。**最低限どのようなことをしなければいけないのか**。こうしたところの整理が必要ではないか。
- ・保護者は子どもに対し伝える立場に立つことが多いが、**しっかり伝わったかどうか最後まで見届けることが必要**である。
- ・家庭における親の意識は、熱心な親と放任する親と「二極化」している。子どもたちへの関わり方が薄い方々に対し、どのように町の教育に対する理解を求めていくのか。
- ・子どもが変わってきたこと（成長している）について、まず、**親が気づくことができるための手立て**があってよい。
- ・これからの教育を進めていく上では、家庭の状況が大きく変化している視点も抑えなくてはならない。そのような変化に対応していく中で、**二極化している親の意識を縮めていかなければならない**。
- ・かつて「夫は外で働き、妻は家事をする」といった役割分担が社会の固定概念として受け入れた時代があった。1980年代から女性の社会

進出が促進され、家庭における状況もこのころから変化してきたのではないか。

- ・ 家庭における子どもと接し方がわからない親がいるのではないか。子育て相談体制を充実することが必要である。
- ・ 家庭で子どもと接する時間が多くなることで、むしろ親が子供から教えられる機会が増える。親として成長できる側面がある。
- ・ 共働き世帯が多くなってきたことで、学童保育や放課後児童クラブなど希望は多くなってきており、こうした家庭で行うべき教育を支援するサービスは今後も必要である。
- ・ 家庭における教育の課題については、他部局（福祉）との連携が必要となってくるのではないか。
- ・ 典型的な共働き世代で親に子育てを依存してきた時代を過ごした。今は、親に子育てを依存できない状況（核家族化）があるので、そうした社会の変化に応じていかなければならない。
- ・ 小中学校の入学式・卒業式に父親の参加が目立つようになった。
- ・ 少子化に伴い、一人の子どもに賭ける思いが強くなってきている。
- ・ 社会や生活様式の多様化は、子どもたちの格差にもつながっているのではないか。例えば塾に行かせる子と行かせられない子又は行けない子、さらには私立学校に通う子と公立学校に通う子の間で生じている格差などであり、その格差は、学力格差のほか、体力格差にも及んでいると考えられる。そうした面に対応しなければならないことがあるかもしれない。

(3) 地域・その他における教育の課題について

- ・ 学校や家庭に比べ、これまで地域における教育の視点は強調されてこなかった。社会が変化に対応しなければならない視点の一つに「地域教育」があると思う。「地域の子どもは地域で育てる」といった意識を広げていくことが大切であると考えます。
- ・ 地域の大人の姿を見て子どもたちが育っている環境にあるとは言えない。かつて良いことは良い、悪いことは悪いといったことを言ったものであるが、それも言えない大人が増えてきているのではないか。また、地域における生活環境の悪化も子どもたちに悪い影響を与えている。
- ・ 吉田の子どもの特徴は、「素直で与えられたことは真面目できちんとやる」一方、「自ら正しく判断して決める」といった面で弱いところがある。子どもたちの自己肯定感を育む上では、子どもたちを取り巻く地域の大人

人のサポートが必要であると思う。

- ・ これから退職するシニアの方は、地域で何らかの活動をしたいと思っているが、その受け皿が出来ていない。また、リーダーも育っていないのではないか。
- ・ 世代を超えた交流において、活発な地域もあればそうでないところもある。学校の依頼を受け、地域の方がそれに応じる「学校応援団」活動の展開は、子どもたちや学校、地域にとっても有為な事業である。しかしながら多種多様な人材をどのように確保するか、また、どのようにコーディネートしていくかが課題であると思う。
- ・ 吉田町は1中学校3小学校が連携しやすい地域であり、そのような特色や強みを生かした教育の展開ができないだろうか。生涯学習を含め、生まれたときから常に教育を受けている状況をつくるのであれば、**保育園・幼稚園・小学校・中学校という一連の中で教育を考えることができないか。**
- ・ 幼稚園・保育園から小学校に進級するときや、小学校から中学校に進級するときには生じる不適応現象「小1プロブレム、中1ギャップ」の問題を考えると、今後は「一貫した教育」や「つながりのある教育」が重要である。
- ・ これからは、**小学校と中学校の交流、小学校と幼稚園・保育園の交流**が必要になってくる。
- ・ 小学校1、2年生の発達段階を考えたとき、「理科」と「社会科」を分けて考えることができないことから「生活科」ができた。その背景には、**幼稚園・保育園から小学校へのつなぎの部分**を大切にするという意図が含まれている。
- ・ 理科離れは幼少期における自然に接する機会が少ないとことが要因と思われる。学校の授業だけでなく、**自然体験を通じた社会教育活動や地域の世代間交流は貴重な学習の場**であるため、こうしたところの連携も可能ではないか。
- ・ 吉田町の教育を考える中で**外国語教育**があってもよい。
- ・ 町独自の学力調査をやっているが、子どもたちの**9年間の現象や結果**などを分析して**対策**を講じることも必要ではないか。

## 「教育の大綱」策定に向けて

### ○学校が担うべき教育

- (1) 現状と課題 授業以外に行う学校事務が増加しており、教師の多忙化が顕著になっている。
- (2) 基本的方向 教師が授業に専念できる環境づくりを進め、多様化するニーズに対する時間を確保する。
- (3) 具体的方策 児童生徒一人一人に対するきめ細かな教育を行うための手立てとは・・・。

### ○家庭が担うべき教育

- (1) 現状と課題 家庭における子どもとの接し方がわからない親がいると考えられ、親の意識も「二極化」している。
- (2) 基本的方向 家庭で行うべき教育を支援し、保護者が子どもを見守る環境づくりを進める。
- (3) 具体的方策 家庭で行うべき最低限の教育及び支援すべき手立てとは・・・。

### ○地域が担うべき教育

- (1) 現状と課題 子どもを豊かに育む活動が展開されている反面、地域によっては活動の受け皿がないところもある。
- (2) 基本的方向 「地域の子どもは地域で育てる」といった意識をさらに高め、地域ぐるみの学びの場づくりを進める。
- (3) 具体的方策 社会教育活動や地域の世代間交流などを積極的に行うための手立てとは・・・。

### ○町が独自に行う教育

- (1) 現状と課題 3小学校の児童が1中学校に入学している実態があり、連携を取りやすい地域の特色がある。
- (2) 基本的方向 幼稚園・保育園を含めて吉田町独自の一貫教育(つながりのある教育)を進める。
- (3) 具体的方策 小中一貫教育を進める上での手立てとは・・・。

## 吉田町教育推進委員会委員一覧

任期：平成27年7月2日～平成29年7月1日

(敬称略)

### 1 委員

No.	氏名	所属	要綱第3条第2項
1	柳原 学	住吉小学校 (主幹教諭)	1号該当
2	石間 克俊	中央小学校 (主幹教諭)	〃
3	岩本 幸子	自彊小学校 (教頭)	〃
4	竹下 知行	吉田中学校 (主幹教諭)	〃
5	小林 宏美	静岡大学教職大学院 (住吉小学校教諭)	〃
6	野中 富子	社会教育委員	2号該当
7	久米 武志	吉田町体育協会会長	〃
8	西宮 友加里	小学校PTA (中央小PTA副会長)	3号該当
9	増田 真由美	中学校PTA (吉田中PTA副会長)	〃
10	島田 桂吾	静岡大学教職大学院講師	4号該当

### 2 事務局

No.	氏名	役職	備考
1	水野 辰明	吉田町教育委員会事務局長	
2	松永 満	吉田町教育委員会事務局長補佐	教育総務部門
3	岸端 大輔	吉田町教育委員会事務局主査	〃
4	吉添 祐之	吉田町教育委員会事務局主事	〃



## 第1回吉田町教育推進委員会 議事要旨

1 開催日時 平成27年7月2日(木) 午後3時～5時10分

2 開催場所 吉田町役場 5階 会議室2

3 出席者

委員長	島田 桂吾
副委員長	岩本 幸子
委員	柳原 学
	石間 克俊
	竹下 知行
	小林 宏美
	野中 富子
	久米 武志
	増田 真由美
	西宮 友加里
教育長	浅井 啓言

4 協議結果の概要

- (1) 委員長に静岡大学教職大学院の島田桂吾講師、副委員長に自彊小学校の岩本幸子教頭を選出した。
- (2) 吉田町教育推進委員会の目的と役割に加え、協議事項となっている「教育の大綱」の策定に向けた今年度の予定が確認された。

5 意見交換における発言要旨

- (1) 授業に専念できる環境づくりについて
  - ・ 社会の多様なニーズに応じて書類等を作成すればするほど、新たな業務が発生しており、報告や確認作業も多くなっている状況にある。
  - ・ **様々な家庭に応じた生徒指導面の対応**に時間を割かれている。
  - ・ 若手の教師が夜10時ころ教室から戻ってくるのを見かけた。翌日の授業準備に手間取ったのだろうと思うが、**若手教師には十分な研修が必要である**と感じた。また、県下の生徒数であるため、印刷物や事務処理一つとっても大がかりであり、その分の時間を割かれている。

- ・ 従来から教師の多忙化は言われ続けてきたが、正直、今の状態は麻痺している。日常、児童や教師への対応に時間を割かれ、教育委員会から流れてくる膨大な文書の事務処理は、結局、休日の勤務に回している状況である。
- ・ PTAの会合で夜9時ころ終了しても、ほとんどの先生方が残業をしているのにはびっくりした。身体のためにも負担を減らすべき。
- ・ 教師の多忙化について、PTA役員を経験してはじめて知った。それらを知らない保護者が多数いる。保護者のニーズは教師の多忙化に直結するが、どうしても教師に頼りたい面もある。
- ・ 先生方が児童生徒や保護者の目線に立って夜遅くまで努力しているが、PTA総会などの状況をみると保護者がそれに応えていないと感じた。PTA総会などは、大切な意思疎通の場であるため、保護者は積極的に先生方とのかかわりを持ってほしい。
- ・ 先生方が部活動で苦慮しているので、**地域の方（OBやシニア）が支援できる体制**があるとよいと思う。
- ・ 教師の多忙化については、教師自身だけでなく保護者も地域の方も認識はしている。「多忙」と「多忙感」があり、「多忙」は防げないが「多忙感」は防げる。

(2) 親の意識の二極化と家庭教育の支援について

- ・ 特別に支援を要する子どもにもきめ細やかな対応が求められている。また、家庭的な問題を抱えている子どもに対して、**スクールカウンセラーやスクールソーシャルワーカーが活躍**しているが、学校は、今後このような方とどのように連携していくか考えていかなければならない。
- ・ 保護者の実態として教育に熱心な親とそうでない方の差は大きい。また学校の様子を知っている方とそうでない方の差も大きい。
- ・ 先生方が必至に対応してくれているのを知っているので、自分も何ができるのか常に考えている。
- ・ 子どもの外見に気を配っている保護者が増えたように感じる。また、学校を離れた地域活動の場において、**比較的教育に熱心な親から活動を軽視する（習い事を理由に活動に参加させないなど）のではないかと危惧**している。
- ・ 昨年の保護者を対象にした教育講演会は1割程度の80人であったのに対し、本年は昨年の倍に増えた。子どもの自己肯定感を高めるため、学校では全教職員で取り組んでいるので、家庭でも子どもの自己肯定感

を高めるため、保護者の協力を願いたい。厳しいようであるが、講演会の出席率はまだ低いと感じている。

- ・ 仕事をもっている立場で平日の昼間に講演会をやっても参加できるかどうかはわからないし、夜も子育てを放棄することができない。
- ・ 学校は良かれと思って講演会をやっているが、保護者は働く時間で行けないことを学校は受け止めているか。社会が変化している中で来ないことを責めてはいけない。学校の論理で物事を進めてはいけないと思う。

(3) 地域の子どもは地域で育てることについて

- ・ すでに地域で活躍しているシニアの方いるので教育の場で生かせないだろうか。
- ・ ボランティア活動内容を紹介しながら、シニアの持つ豊かな経験を地域に反映して生かそうと「社会教育プラットフォーム」として団体間の連携をさせようとしている。現在、互いの団体間の活動を知る機会がない。
- ・ 子どもたちの健全育成にそれぞれの団体関わっているが、団体間の連携をどのように進めていくか社会教育委員会で検討をしようとしている。まずは団体が集まる場を作りたいと考えている。
- ・ 子どもたちは地域を超えた活動をしている。今後は、世代を超えた交流もできるように、シニアの方も積極的に地域に入っていくことが必要ではないか。
- ・ 今までは地域の活動に参加することが消極的であったが、PTA活動を通じて地域に関わることの大切さを感じた。子どもたちがいろいろな視点で物事を見たり、人を見たりして感じる必要があると思った。子どもたちの視野が広がればいいと思っている。
- ・ サマーステイや通学合宿への参加において、積極的な子と消極的な子と二分する。
- ・ 地域の方が積極的に学校に関わってくれる。地域の方は、教師と違って余裕をもって子どもたちと接していることに気づかされる。
- ・ 社会教育事業の一つとして「学校応援団」を進めている。支援してもらった側と依頼を受けた側で双方において良い効果をもたらされている。
- ・ 閉鎖的であった学校に地域の方が入ることによって教師も刺激を受けている。
- ・ 教師は学校の中でしか子どもを見ていないが、学校応援団の方は地域の中での子どもの様子を見ていたため、子どもの貴重な情報が得られる。学校側が地域との関わり方を工夫する必要があるのではないかと。

- ・ 「地域の子どもは地域で育てる」という意識を高めていかなければならない中で、すでにいろいろな活動が展開されていたり、必要性は感じていてもその一歩が踏み出せなかったりする実態がある。

(4) 町独自の一貫教育について

- ・ 昨年度、幼稚園・保育園の先生方と1年の担任との交流した際、小学校側からは学習面よりも話が聞けたり、座っていたりできるよう基本的な生活面での指導をお願いしている。
- ・ 小・中連絡会を設けている中で、中学校側は、小学校側から事前に生徒の情報を入手し、指導方法のアドバイスをもらっている。小・中が連携する上では、こうした機会は必要と感じている。
- ・ 家庭が二極化している問題やしつけ、学力の問題についても幼・保、小・中連携をすることで解決できることがあるのではないかと。また、これまでは、生徒指導面の連携が重視されているところであるが、これからは9年間を見越して「付きたい力」というようなものを求めていくべきではないか。そのために何を核にしていくか議論する必要がある。
- ・ 小・中一貫の場合3つの段階があると思う。1つ目は「人」(児童生徒・教師間)の連携、2つ目に「内容」(カリキュラム)の一貫性、3つ目に「制度」(人事配置等)である。現状では、先生同士の連携が行われているようである。今後、吉田町として中学校卒業するまでにどのような力を身に付けさせたいか、教師だけでなく、保護者や地域の方も理解できる目標がほしい。さらに、幼・保、小・中の縦の連携に併せ、学校、家庭、地域の横の連携も視野に入れることも必要である。

(5) 教育者の姿勢と目指す教育について

- ・ 教師としての立場は「確かな学力を身に付けさせる」ことも大切であるが、**吉田町でたくましく生きていくための教育**を考えるべきである。そうした中で学校は何ができるのかという考え方をしなければいけない。
- ・ 生徒指導の基本に立って、子どもの良さに気付いて、引き出して、価値づけて、広めていきたい。教師として子どもたちの良い面を伸ばしていきたい。
- ・ 子どもたちには「吉田っていいな」、「仲間っていいな」、「自分っていいな」と思える教育を目指していきたい。
- ・ 町の魅力に接し**自己肯定感を高めていく教育**が大事だと思っている。
- ・ 常に生涯学習という視点を大切にしている。**社会の中で生き抜いてい**

ける力を身に付け、生き生きと生活できるような教育が必要である。

- 地域の方々に支えていることに気づかされていることを踏まえ、感謝の気持ちを持てる子どもを育てていきたい。
- 勉強ばかりを押し付けしないで、周囲の方と協力し合いながら子育てをしていきたい。
- 現役世代は非常に多忙な生活を送っている中で、シニア世代はある程度心の余裕を持っている。地域活動で子供たち交流していく上では、**ゆとりのある教育**を提供したい。

## 教育の課題を解決するための手立て

基本的方向	解決に向けた方策（案）
<p><b>【学校】</b> 教師が授業に専念できる環境づくりを進め、多様化するニーズに対する時間を確保する。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>(1) 生徒指導に係る家庭との連携</li> <li>(2) 部活動における外部指導者の導入</li> <li>(3) 若手教師に対する研修機会の充実</li> <li>(4) スクールカウンセラー、ソーシャルワーカーの活用</li> <li>(5) 学校応援団の活用</li> </ul>
<p><b>【家庭】</b> 家庭で行うべき教育を支援し、保護者が子どもを見守る環境づくりを進める。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>(1) 子育て世代に必要な知識情報の提供</li> <li>(2) 大人のための学習機会の提供</li> <li>(3) 家庭学習の手引きの活用</li> </ul>
<p><b>【地域】</b> 「地域の子どもは地域で育てる」といった意識をさらに高め、地域ぐるみの学びの場づくりを進める。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>(1) 地域（OBシニア）人材の活用</li> <li>(2) 社会教育プラットフォーム推進</li> <li>(3) 体験型学習の拡大</li> <li>(4) 価値（町の文化・伝統、スポーツ）あるものに触れる機会の拡大</li> </ul>

## 町内小・中学校の教育目標と実現に向けた取り組みについて

	住吉小学校	中央小学校	自彊小学校	吉田中学校
1 学校教育 目標	豊かな心 学ぶ力  豊かな心…人間尊重の教育を基盤として「心の教育」の推進 学ぶ力 …生きる力を育む確かな学力の育成と教育活動の充実	たくましい子  人、もの、ことに積極的にかかわり、自己課題を見つけ、試行錯誤を繰り返しながら、自らに磨きをかけ、成長していく子。	自らつとめ はげむ子  自分の生活、学習において、自分にふさわしい具体的な目標をもち、その実現にむけて英知を傾けて考え、正しく判断して実践し、粘り強くやり遂げる子。	活力あふれる吉中生  一つの目的をもって、精一杯心と身体をつかって活動し、その結果をみんなのために、社会のためになり、ひいては自分のためになる力を備え、全身からあふれ出てくる行動を期待。
2 重点目標 (つきたい力)	「やりぬく子」  (主体性、表現力、人間関係力、自己指導力、体力)	「仲間とともに自分をみがく子」  (粘り強くやり抜く、善悪の判断力、互いに認め合い思いやる心)	「すすんで学ぶ子 自分を伸ばす子」  (自主性、主体性、集団の中で自分を高めていく力)	「未来へ 磨き 高め合う」  (自尊感情、自己肯定感、確かな学力、思いやりの心、所属感)
3 教育上の 育成課題 として捉 えている こと	○仲の良い友達同士や対教師であっても挨拶ができない子がいる  ○言われたことは素直にやるが、自ら判断したり、決定したりして、進んで取り組む力は弱い。  ○自己肯定感が低い	○主体性、挑戦意欲、継続力、判断力が弱いく、自尊感情が低い	○やる事が明確になっているときは、意欲的に取り組めるが、困難な場面になるとあきらめたり、人に頼ってしまったりする。追求する姿勢が弱い  ○学習のけじめ、規律力が弱い	○規範意識が弱い(自己肯定感が低い)  ○人のために動く姿が弱い  ○受け身的な学習が目立ち、学力定着への意欲が乏しい
4 課題への 取り組み	1 自己肯定感を育み自尊感情を高める生徒指導の研究と実践  2 伝統の「誇りの育成」を受け継いだ三活動(自慢づくり、褒め合い活動、汗の旗)の充実  3 あいさつ、言葉遣いへの指導の充実	1 多様な生き方を認め合い、それらを自分の中に取り入れて、自分を磨こうとする意欲の高揚  2 誇り・自尊感情をもって、自分の目標に向かって活動する主体性と責任感の育成  3 学びの実感、成長の実感の醸成	1 自分たちで判断して行動する子の育成  2 向上心をもった子の育成  3 けじめをもって生活する子の育成  4 集団の中で自分を高めていく子の育成  5 自律した子の育成	1 吉中授業スタイルをベースに「学ぶ喜び」を実感させる。 2 毎時間の授業でねらいと振り返りを徹底した「確かな学力」の育成 3 ありがたいの言葉が自然といえる「思いやりの心」を育てる 4 最後まであきらめないうで頑張る、粘り強く考える等たくましさ育てる 5 吉中未来プロジェクトを通じて「自己肯定感」を育てる。

参考資料：学校経営書

